

3 県内で伝承されている昔話の特徴 その一 動物昔話

県内で伝承されている昔話のうち、よく聞かれる話を対象に、動画のコメントでは説明しきれなかった点も補足して解説します。

動物昔話の中でよく聞かれる話は、動物の習性や形態の由来を説くものです。

本シリーズの話の中では、1)「十二支由来」(No. 45)の干支の順番の由来、2)「蛙の親不孝」(No. 19)の雨の降る前に蛙が鳴く由来、3)「雀と燕と蛇と蛙」(No. 50)の雀は米を食べ燕は虫しか食べることができない由来、4)「猿どんと蟹どん」(No. 38)や5)「猿の尻尾の由来」(No. 40)の猿の尻が赤い由来、6)「猿の生き胆」(No. 39)のクラゲの骨がない由来などです。

このうち、1)「十二支由来」、2)「蛙の親不孝」、3)「雀と燕と蛇と蛙」は、県内の動物昔話の中で最も伝承度が高く、「三大動物昔話」と言ってもいいものです。さらに、3話の中でも「蛙の親不孝」は伝承度が最も高く、全ての昔話の中でもトップクラスに位置しています。

この3話の伝承度が高い理由は、話が語り手や聞き手の身近にある動物の由来話の形式をとっているためだと考えられます。由来話の形式をとることで地域生活の中に根付き、伝承基盤を確立しているからです。

また、動物昔話は、昔話の聞き手である子供達が最初に聞く昔話です。

話が短いこともあります。小さい頃に聞いた記憶は比較的後年まで残っているものです。また、登場する動物は、身の回りの生活の中で見かけることが多く、その動物を見るたびにこの話を思い出し、記憶が固定されていったことも、こうした話の伝承度が高い理由ではないかと考えます。

上記6話のうち後半の3話は、前半の3話と比較すると、比較的話が長くストーリーも複雑です。聞き手が同じ子供だとしても、幼児に対しては前の3話、その後、成長していくにつれ後の3話のように、年齢に応じて話を使い分けられていたようです。

さて、このように動物の習性や形態の由来を説く動物昔話は、比較的伝承度が高く、県下全域で聞かれますが、次のように、一部の地域でしか聞けないような話もあります(いずれも本シリーズに未収録)。

(1) 「チョウヒン鳥の親不孝」(有明海沿岸部でしか聞けない話)

この話は、先程紹介した「蛙の親不孝」が、雨の降る前に蛙が鳴く由来を説くのに対し、潮が満ちてくる前に干潟の鳥が鳴く由来を説く話です。

現在のところ、有明海沿岸部の干拓地を中心に伝承が確認されているのみです。

ストーリーは、「蛙の親不孝」とほとんど同じです。

異なるところと言えば、主人公の蛙が有明海の干潟に生息する鳥に変わっている点と、雨の降る前に鳴くという設定が、潮が満ちてくる前に鳴くという設定に変わっている点だけです。

例えば、佐賀市川副町で採集された話では、次のようになっています。

「チョウヒン鳥の親不孝」(要約)

昔、親の言いつけの反対ばかりする子供がいた。親は、自分が死んだ時に、「陸に埋めてくれ」と言ったら、子供が反対をして自分を海端に埋めるだろうと思い、「自分が死んだ時は海端に埋めろ」と言った。そうしたら、その子供は、親が死んだ時に初めて自分のしてきたことを後悔して、親が死んだ時だけでも親の言うとおりにしてやろうと、親を有明海の手端に埋めた。それで、潮が満ちてくると墓が潮に流されそうになるため、鳥になり、「チョウヒン、チョウヒン、チョウヒン」と言って飛び上がって鳴くという。

～「川副の口承文芸」(昭和53年発行)より～

ア 伝承範囲は有明海沿岸の干拓地が中心

この話型は、現在のところ、有明海沿岸部の一部の地域でしか伝承が確認されていません。

現在、伝承が確認されている地域は、佐賀市の諸富、川副、東与賀、久保田、小城市の牛津、芦刈の干拓地です。

同じ干拓地を持つ白石、鹿島、太良では、まだ伝承が確認されていません。

牛津町での調査では、主に、国道34号線を境に北の内陸部では蛙、南の有明海に近い所では鳥という風に、伝承範囲が線引きされています。

こうした事実が佐賀の干拓の歴史(特に、江戸時代の佐賀藩の干拓の歴史)と関わりがあるかは、今後の研究課題です。

これを明らかにするためには、筑後川を挟んだ福岡県側の伝承はどうなっているのか、現時点で伝承が確認できない白石、鹿島などの有明海沿岸部には本当に伝承が無いのかなどの疑問を解消していく必要があります。

イ 鳥の名前が地域により異なる

この話は、主人公の鳥の名前が地域により少しずつ異なっていることも特徴の1つです。チョウヒン鳥という名称は川副町に圧倒的に多い名前ですが、東隣の諸富町では、「チョウヒン鳥」の他に「トヘイ鳥」や「シッタタキ」などの名称が混在しています。

一方、西隣の東与賀町では「潮水鳥」の名称が圧倒的です。

また、嘉瀬川を挟んで久保田町や芦刈町では「チョウヒイ鳥」、少し離れた内陸部の牛津町では「千鳥」などの名称になっています。

「チョウヒン鳥」や「トヘイ鳥」という名称は鳥の鳴き声から、「潮水鳥」は鳥の生息する場所から、「シッタタキ」は鳥の動作からきていると思われます。

ところで、主人公の鳥が干潟にいる鳥であることは間違いないと思いますが、学名上、何と言う名称の鳥かの特定ができていません。ひょっとすると、鳥の名称がこれだけ異なっているということは、この話の主人公の鳥は、地域によって、あるいは語り手によって異なっているのかもしれない。

このように、主人公の鳥の名前一つとりあげても、「主人公の鳥は学名上何という鳥なのか」や「鳥の名前が合併前の旧市町毎で異なっていることが何を意味しているのか」など、この話を巡る不思議は残っています。

ウ 生活の中に根付いている

この話が生活の中に根付いており話される機会が多かったということは、親の言いつけの反対ばかりする子供には、「チョウヒン鳥のごたっ」と言っていたとする語り手の話からもうかがい知ることができます。

この点は、「蛙の親不孝」が親の反対ばかりする子を、蛙の名前からとって「ホトケビッキーのごたっ」(旧佐賀市)と言ったり、話の内容(山に行けと言えば川に行く、川に行けと言えば山に行く)からとって「山川もんのごたっ」(佐賀市大和町)と言っていたとすることと同じことだと考えられます。

エ まとめ

この話は、「蛙の親不孝」が有明海沿岸部において独自の変化を遂げた結果、他の地域にはない有明海沿岸部特有の話として定着していったものと考えられます。

この話がいつ、どのようにして生まれたかは明らかではありませんが、有明海の干潟に集まってくる鳥の生態、さらに有明海の干拓地の広がり等のこの地域独特の背景がこの話の発生と成長に大きく関係していることは間違いないと思います。

(2) 「時鳥(ほととぎす)の鳴き声由来」(佐賀県でしか聞けない時鳥の鳴き声の由来話)

この話は、時鳥の鳴き声が「カッチャントケタカ」と聞こえるとする由来を説く話です。これまで、**県外では同様な話は確認されていません。**

佐賀市の語り手、納富信子さんの話です。話の内容は、次のとおりです(本シリーズには未掲載)。

「時鳥の鳴き声由来」(原文のまま)

むかーし、かっちゃんていう女の子がね、櫛でいくらけずってもけずっても、髪がほぐれんもんじゃい、いつも、お母さんが湯でのぼしたいして、解いてやいよったらしかもんね。

そいぎい、お母さんが死んでしまって、二番嬢(が)さんが来たもんじゃい、かっちゃんの髪ばほぐして、解いてやっ者(もん)のおらんごとなつて。

お母さんのおる間は、髪ば櫛でけずってもらいよつたばつてん、二番嬢さんになつたぎい、そがんことしてくれんもんじゃい、自分で解かんばでしょう。そいもんじゃい、解けんもんじゃい、死んだお母さんがホトトギスになつてね、お母さんがしてやらんぎい、誰(だい)でんしてやる者のおらんもんじゃい、

そいで、お母さんが、「かっちゃんとけたか。かっちゃんとけたか」ちゅうて、死んでからまで、自分の生んだ子が心配やもんだから、鳴くんだつて。

そいぎい、ばっきや

～「さが昔話」(平成14年発行)より～

ア 伝承範囲は佐賀方言区内か

この話は、脊振の山間部を中心に、佐賀市、小城市、嬉野市など、県下一円に広がっています。現在、分かるだけでも、十数話が確認されています。

ただし、方言区が異なる唐津市周辺(唐津方言区)や鳥栖・基山(田代方言区)からは採集されていない

ことから、ひょっとすると、佐賀県内でも江戸時代の鍋島藩域である佐賀方言区内での伝承に限られるのかもしれない。

この点については、もう少し詳しい採集資料の整理とさらなる資料の収集が必要と考えられます。

イ 時鳥の鳴き声の聞きなしが他県と異なる

動物、特に鳥の鳴き声に意味を持たせて聞くことを、一般的に「聞きなし」と言います。

時鳥は、「トウキョウトツキョキョカキョク」に代表されるように、鳥の中でも、特に聞きなしの種類が多い鳥です。

鳴く時の時間の長さ、一瞬甲高く鳴く声が、他の鳥に比べて際立っていることや、別名「たまむかえどり」などとも呼ばれ、古くから、霊界とこの世をつなぐ鳥として日本人に親しまれてきたことも影響しているのではないかと思います。

実は、この時鳥の鳴き声の聞きなし方が、佐賀県と他県では明らかに異なっているのです。

具体的には、佐賀県では「カッチャントケタカ」が一般的ですが、他県では、「オトトコイシ」とか「オトトキタカ」などと聞きなししているところがほとんどなのです。

ちなみに、隣の福岡県では「ほっちょかけたか、おとと恋し」、長崎県では「おととはきたか、おととはおらんか」、熊本県では「たんたんたけじよ、おととが恋しい」とされており、弟という言葉が必ず出てきます。九州だけでなく、本州においても同様です。

佐賀県での時鳥の聞きなし方は全国的にみて孤立しており、佐賀独特と言っても過言ではないような気がします。

長崎、福岡、熊本は同じ方言区（九州西部方言区）であるにもかかわらず、このように時鳥の聞きなし方が違うということがどういう意味をもつものなのか、今後の研究課題です。

ウ 聞きなしに付随する由来話も異なる

さらに面白いのは、時鳥の鳴き声の聞きなし方だけでなく、聞きなし方に付随する由来話そのものも佐賀県と他県とでは異なるということです。

具体的には、他県においては、「オトトコイシ」という聞きなし方で、次のような話が伝承されています。

「ほととぎすと兄弟」（加筆あり）

弟が盲目の兄に掘ってきた山芋のうまいところを食べさせ、自分は山芋の首を食うが、ひがんだ兄が弟はうまいところを食べていると疑う。

それで、弟が腹を切ってみせると、山芋の首のところが入っている。

兄の目が開き、真実を知って後悔した兄はほととぎすになって、「おととはきたか、おととはおらんか」と鳴く。

～「日本昔話通観 第24巻」（昭和50年発行）より、一部分かりやすいように加筆～

この話は、話型としては「時鳥兄弟」とされており、同じ話は、北の青森県から鹿児島県まで全国で伝承が確認されています。一方、佐賀県内では、この話は伝承例がほとんど確認されていません。

ほとんどとしたのは、多くの昔話を知っている本格的な語り手の中には、この話を知っている人がいるか

らです。

例えば、佐賀市内の本格的な語り手である納富信子さんは、両方の話を知っておられます。

ただし、時鳥の鳴き声の由来として最初に納富さんが話されたものは、前出の「時鳥の鳴き声由来」の方でした。その後、こちらの方から「時鳥兄弟」の話もご存じかどうか聞いたところ知っているとのことでした。本人としては、「時鳥の鳴き声由来」の方が、時鳥の鳴き声の由来話としてはしっくりきていたのだらうと思います。

エ まとめ

これまでの話から、やや短絡的ではありますが、次のようなことが言えると思います。

「時鳥兄弟」は、全国的に圧倒的な広がりを持っていることから、いつの時代かは分かりませんが、当然佐賀県にも入ってきたと考えられます。

しかし、既に、県内には、同じ時鳥の鳴き声の由来を説く「時鳥の鳴き声由来」という話が別にあったことから、本格的な語り手以外には伝承の広がりを見ることができず、結局根付けなかったのではないかと推測されます。

しかし、「時鳥の鳴き声由来」の話が、いつの時代にどのようにして佐賀に生まれたのか、謎は残ったままです。